

—スタッフ紹介—

役 職	スタッフ名
部 長 兼リハビリテーションセンター副センター長	檜根 晋
医 長	倉敷 有紀子
医 員	高山 瞳
医 員	坂本 明子
非常勤医員	劉 勇

—概要—

糖尿病・内分泌代謝内科では糖尿病および内分泌疾患（甲状腺、下垂体、副腎疾患）の患者の診療を行っている。当科の特徴としては、救命救急センターからの糖尿病、内分泌緊急症例を救命診療科との連携の下、診断・治療を行っている。また妊娠に合併した耐糖能障害、甲状腺機能異常に関して、産科と連携し治療を行っている。甲状腺疾患の近隣からの紹介は多く、専門医の下診療を行っている。

糖尿病治療においては、医師、看護師、栄養士、薬剤師、理学療法士がチームとなり、各々の職域の特徴を活かしながら、患者教育、指導を行っている。当院における糖尿病療養指導士は10名であり、いずれの職種にも療養指導士が在籍している。それらのスタッフにより専門性の高い患者指導が可能となっている。

人員は常勤医としては2018年3月にて高井医師が退職したため、5名体制となった。非常勤医として劉医師が引き続き勤務継続。2018年4月より中谷医師が甲状腺診療を主として診療を開始。長年当院での甲状腺診療に貢献いただいた矢頃医師は2018年7月にて退職された。大阪大学総合地域医療講座は米田助教が8月にて退職され、米田助教退職後は同講座より藤田助教で診療を行った。

—実績—

外来診療については、糖尿病および内分泌疾患が主であり、1日平均の外来患者は36.3人であった。一方、入院については、糖尿病教育入院を中心として162症例を当科にて担当した。当科入院患者は2017年度と比べ60症例程度減少した。また他科入院中患者の血糖コントロールなどを共観として診療し、383症例を受け持った。共観患者数については2017年度228症例であり、前年度と比べても大幅に増加した。

糖尿病患者の外来指導として、フットケア外来および糖尿病透析予防指導を施行。フットケア外来での指導件数も前年147件から本年199件と増加した。糖尿病透析予防指

導についても前年5件から本年61件と大幅な増加となった。

入院患者の病名の内訳は糖尿病患者が138例（糖尿病ケトアシドーシス8例、高血糖高浸透圧症候群2例、1型糖尿病12例、2型糖尿病103例、その他6例、低血糖性昏睡7例）、下垂体疾患9例、副腎疾患6例、甲状腺/副甲状腺疾患1例、その他の疾患13例であった。

糖尿病教育指導として隔週の月曜日から金曜日午後の30分間を用いて、糖尿病教室を施行した。講師は曜日毎に各職種（医師、栄養士、理学療法士、薬剤師、看護師）が担当した。また糖尿病教室に加え、毎週月曜日から金曜日の午前中の30分間糖尿病指導用のDVD視聴会を開催した。

また市民を対象にした生活習慣病教室を行い、毎回多数の受講者が見られた。

院外啓蒙活動として、2018年11月10日土曜日当院2階メインホールにおいて世界糖尿病デーりんくう健康フェスタとして市民参加型のイベントを行った。本企画は昨年からは当院にて始めた企画であり、今年が2度目であったが、多数の市民に参加いただいた。

—今年度の成果と反省点—

外来件数に関しては前年と同程度であったが、入院症例数に関しては減少が見られた。フットケア外来および透析予防指導の件数に関しては大幅に増加した。入院症例数の低下に関しては、他科共観患者は増加していることから、他科共観を行った糖尿病患者を積極的に、糖尿病教育入院に導き入れることが必要と考えられた。

—来年度への抱負—

本年度は入院症例が大幅に減少したことから、入院患者を積極的に増やしていくことが必要と考えられる。

昨年度より糖尿病腎症に対する透析予防指導は増加を認めており、この流れを来年度も継続して、症例を増やしていくことが必要である。

また当科は日本糖尿病学会、日本内分泌学会両方の認定教育施設であり、当地区における専門医研修の拠点である。専門医を希望する医師を募り、専門医をより多く、輩出していくことが必要である。